

「上海新華書店旧蔵書」に含まれる内部図書について

周 俊 (同志社大学大学院グローバル・スタディーズ研究科助教)

国立国会図書館（以下、「NDL」という。）関西館アジア情報課では、蔵書構築及び蔵書評価の参考とするため、定期的に外部有識者からのヒアリングを実施している。2024年2月2日、同志社大学大学院グローバル・スタディーズ研究科助教の周俊氏を関西館に招き、「上海新華書店旧蔵書」に含まれる内部図書についてヒアリングを行った。本稿は、関西館アジア情報課でその概要をまとめたものである。

上海新華書店旧蔵書とは、中国の上海新華書店が保管していた書籍の見本約17万冊からなるコレクションであり、1930年代から1990年代初めまでの上海を中心とする地域の代表的出版物を多く含む。児童書のみ国際子ども図書館で、児童書以外は関西館で所蔵している¹。

内部図書あるいは内部雑誌とは、中国の内部発行制度（アクセスできる読者を一定範囲に制限する形で発行する制度）に基づき発行された図書や雑誌を指す。詳細は本稿を参照されたい。

*【 】はNDL請求記号。

1 自己紹介

中国・湖南省で生まれ、大学院修士課程以降は早稲田大学大学院で学んだ。博士号も早稲田大学から取得している。東京大学社会科学研究所特任研究員を経て、2023年4月から同志社大学大学院グローバル・スタディーズ研究科で助教を務めている。専門分野は中国現代史、特に中国共産党史である。

2023年に、東京大学社会科学研究所から『中国現代史資料目録集：毛沢東時代の内部

雑誌』【UP81-M1】²を刊行した。これは毛沢東時代（1949年から1966年）に中国大陸で発行された内部雑誌の目録である。また、博士論文に基づく単行書の刊行準備を進めている³。

中国近現代史研究は、古典的な政治史や経済史から民衆史等の社会史へと中心を移してきたが、一面で研究の細分化をもたらし、歴史の全体像を把握しづらくなったとも言われる。私の研究は、「情報」という新しい視点に着目し政治史研究の再生を図るものである。中国共産党が一党支配体制の中で情報（特に不都合な真実）をどう収集、伝達、管理、運用してきたかを、制度的、人的、思想的要因から分析している。

2 中国の情報統制

最初に、内部発行制度の背景となる中国の情報統制についてお話しする。2021年は中国共産党結党100周年に当たり、日本でも重要な研究書がいくつか出版された。石川禎浩『中国共産党、その百年』【A56-C9-M13】、高橋伸夫『中国共産党の歴史』【A56-C9-M14】等である。前者によれば、1920年代の結党から今日まで、秘密主義などを特徴とするボリシェヴィズムが中国共産党の活動の柱石であり続けている⁴。

秘密主義は中国共産党の最も変わりにくい特性である。1949年に革命党から政権党に立場を変えた際に包括的な秘密保持制度を構築し、国家機密の定義を極めて曖昧かつ幅広いものとした。この点は「国家秘密保護法」（1988年制定、2010年改正）⁵に到るまで変わらず、抜本的な改革は行われていない。

URLの最終アクセス日は2024年8月9日である。

¹ 新華書店旧蔵書については以下のページに詳しい。「上海新華書店旧蔵書」リサーチ・ナビ。

<<https://ndlsearch.ndl.go.jp/rnavi/asia/shinka>>

² 「現代中国研究拠点 研究シリーズ No.23『中国現代史資料目録集：毛沢東時代の内部雑誌』」中国学.com。

<<https://sinology-initiative.com/research-resources/499/>>

³ 『中国共産党の神経系－情報システムの起源・構造・機能－』【A56-C9-R2】として2024年6月に名古屋大学出版会

から刊行された。

⁴ 石川禎浩『中国共産党、その百年』筑摩書房, 2021, pp. 28-33. 【A56-C9-M13】

⁵ 2010年の改正に続き、2024年2月27日に同法の二度目の改正が行われ、5月1日から施行された。

「中華人民共和国保守国家秘密法」中華人民共和国中央人民政府, 2024.2.28.

<https://www.gov.cn/yaowen/liebiao/202402/content_6934648.htm>

国家機密の幅広さを示す端的な例として、中華人民共和国初期に人民解放軍の中央軍事委員会気象局が発行していた『天気』という内部雑誌がある。天気予報を各地に知らせるためのものだが、表紙の左側に極秘を意味する「絶密件」印が押されている。これは、天気すら国家機密に含まれたことを示している。当時は『人民日報』でも天気を掲載していなかった。



図1 『天気』第1期の表紙（周氏所蔵）

端的に言えば、情報統制の思想的源流は、1930年代のソ連で出版された『ソ連共産党（ボリシェビキ）歴史小教程』⁶である。ソ連の共産党史をまとめた著作であり、「社会主義が進むにつれて階級闘争が激化し、国内外の隠れた階級敵は常にその党内の代理人と共謀して資本主義復活を企てている」というスターリン流の陰謀論を唱えている⁷。中国でもすぐに翻訳され中国共産党の最重要な学習教材となり、「延安整風運動」⁸の下地ともなった。建国前夜（1948年）の党中央指示⁹や、胡喬

木（党中央宣伝部副部長・毛沢東秘書）の講話（1951年）¹⁰では出版を階級闘争の道具と捉えているが、ここにも同書の影響が見られる。

なお、中国における情報統制とは、情報を流通させないことではない。内部と外部のルートを区別して流通させることを意味する。中国共産党がよく用いる表現では「内外有別」であり、内部雑誌と内部図書もその産物と言える。

3 内部雑誌とは

内部雑誌とは、党や政府機関、学校、銀行、労働組合など様々な組織が内部向けに発行している逐次刊行物である¹¹。その目的は、情報共有・業務交流を図ることにある。現代風に言えば電子メールのCCに近い。既存の目録には、毛沢東時代のものが約7,000種¹²、1980年代のものが約2,500種¹³掲載されているが、目録に未収録あるいは未発見のものも多数ある。なお、機密保持の観点から、中国共産党における情報共有は近代的な電気通信よりも文書資料のほうで行われる傾向が強く、今でも多くの内部雑誌が紙媒体で発行されているはずである。

内部雑誌の機密レベルは表紙に明記されている場合が多く、内容や発行機関の性格によって異なる。概ね四段階あり、機密レベルが高い順に「絶密」「機密」「秘密」「内部」である。「絶密」「機密」「秘密」はどの階級の幹部がアクセス権限を有するか共産党の内規に記されているが、「内部」は記載がなく曖昧である。

4 内部図書とは

内部図書は主に、中国共産党の公式イデオロギーとは異なる政治思想が含まれる海外の研究書籍、文学作品等を翻訳し、その流通範囲を中国国内の一定範囲内に制限した図書を

⁶ 同書には日本語訳【A56-R5-8】も存在する。

⁷ 谷川真一「陰謀論としての継続革命論、そして文化大革命」石川禎浩編『毛沢東に関する人文的研究』京都大学人文科学研究所附属現代中国研究センター、2020、pp.275-302。【GK391-M25】

⁸ 1940年代に、中国共産党が革命根拠地の延安を中心に展開した党員への思想教育運動。

⁹ 「新聞、刊行物および通信社は、特定の階級、党派、社会団体が階級闘争を行うための道具である」

中共中央宣伝部辦公庁編『中国共産党宣伝工作文獻選編1937-1949』学習出版社、1996、p.745。

¹⁰ 「階級闘争には、軍事、政治、経済、思想文化などいく

つかの異なる戦線がある。思想文化戦線においては、最も重要な武器は書籍であり、出版である」

中央檔案館ほか編『中華人民共和国出版史料』第3巻、中国書籍出版社、1996、p.247。【UE21-C18】

¹¹ 周俊「中国共産党史研究の史料利用と課題：内部発行の逐次刊行物を中心に」『中国研究月報』75巻4号、2021.4、pp.1-15。【Z8-419】

¹² 周俊『中国現代史資料目録集：毛沢東時代の内部雑誌』東京大学社会科学研究所グローバル中国研究拠点、2023。【UP81-M1】

¹³ 中国報刊大全編集組編『中国報刊大全（下）非郵発部分』人民郵電出版社、1987。

指す¹⁴。中国共産党は、海外、とりわけ西側諸国の図書の輸入を統制することでイデオロギー防衛を行ってきた。建国初期の段階で、中央公安部から以下の指示が出されている。

「海外の出版物の輸入を厳格に統制することは、文化思想戦線において帝国主義と戦う上での重大な問題である」¹⁵

また、内部図書という制度が生まれた背景には、中国共産党という組織の特性がある。中国共産党は海外（特に西側諸国）の情報や知識をこぼむ硬直化した組織という印象を持たれがちだが、そうではない。実際は「密かに学習する組織」であり、組織の外部に向けて敵を激しく批判する一方で、内部の情報ルートでは敵側の知識を批判的に吸収するという二面性がある。党の公式イデオロギー（レーニン主義やスターリン主義等）と相いれない書籍であっても、一定程度参考になる情報が含まれる内容であれば、読者を一定範囲に制限し発行するという論理である。

1988年に刊行された内部図書の目録『全国内部発行図書総目：1949～1986』【UP5-C14】によれば、中国では1949年から1986年にかけて18,301種の内部図書が刊行された。未収録のものも多数存在すると思われるが、現時点ではこれが最も参考になる目録である。ちなみに、この目録自体も内部図書である。

内部図書には、内部雑誌のような機密レベルが一切記されていない。アクセス権限が非常に曖昧であるため、結果的に多数の読者を得ることになった。アクセス権限を有していた共産党幹部の子弟や研究者から、社会的なつながりを通じて知識青年の手に渡り、上山下郷運動¹⁶を経て農村の民衆にも間接的に伝播した。毛沢東の死後に改革開放が行われたが、その思想的基盤の形成に内部図書が果たした役割は大きい¹⁷。

5 内部図書の種類と特徴

(1) 装丁

内部図書の装丁にはいくつかの種類がある。「灰皮書」は灰色のカバーで装丁された本であり、主に海外で出版された政治、経済関係の書籍を漢訳したものである。1960年前後に中ソ両国の共産党間に生じた路線対立を契機として、ソ連のイデオロギーを批判するため、中国共産党は理論武装の材料となる海外の知識や情報を必要とした。

灰皮書はいわば反動的な知識を含むものであり、「灰」という色には批判的な意味合いが込められている。文化大革命終結後には灰皮書が減少する一方、「緑皮書」「藍皮書」のように緑や青のカバーで装丁され、ソ連や西側諸国の出版物を漢訳し、場合によって中国国民党関係のものも含まれた内部図書が現れた。このような色の変化からは、イデオロギー対立が後退したことが読み取れる。

黄色のカバーで装丁された「黄皮書」もあり、これは主に文学作品を漢訳したものである。中国共産党自身が組織内部の参考資料として編集・発行した内部図書も多数存在するが、これらは内容とカバーの色に関連性はないようだ。

(2) 販売の有無

内部図書には非売品か準市販品かという違いもある。非売品には、出版社、販売価格などの情報が記載されていない。非売品の内部図書は主に中国共産党自身が編纂した資料集であり、資料的価値が非常に高い。

準市販品には、出版社、販売価格などが記載されているが、誰でも購入できるという訳ではない。限定された範囲（中国共産党の幹部、大学の研究者等）に購入カードや紹介状が配られ、それを持っている人間だけが書店の中の内部図書専用窓口で購入できる仕組みとなっていた¹⁸。また、準市販品は甲・乙の二類に区分される。甲・乙の記載がなく単に内部発行とある場合は乙類を意味する。機密資料たる甲類は発行ルートを厳しく制限され、秘密漏洩の責任を追及するためのシリアルナンバーが付与される。一方、乙類の管理は相

¹⁴ 沈展雲『灰皮書、黄皮書』花城出版社、2007。【UE21-C61】

¹⁵ 中共中央宣伝部『宣伝通訊』25号、1951.11、p.35。

¹⁶ 都市の知識青年を農村に派遣し就労させる運動。毛沢東の指示により文化大革命期に盛んに行われた。

¹⁷ 蔣華傑、劉陽「冷戦背景下新中国内部発行制度的演變与影響」『中共党史研究』5期、2013.5、pp.35-44。【Z1-AC17】

¹⁸ 朱学勤「“娘希匹”和“省軍級”——“文革”読書記」祝勇主編『六十年代記憶』中国文聯出版社、2002、pp.181-195。

対的に緩い¹⁹。

(3) 出版社

内部図書を刊行できる出版社は限られる。主な例として、人民出版社、三聯書店（人民出版社の傘下組織）、世界知識出版社（外交部の傘下組織）、作家出版社・中国戯劇出版社（いずれも人民文学出版社の傘下組織）、群衆出版社（中央公安部の傘下組織）、軍事科学出版社（人民解放軍軍事科学院の傘下組織）などが挙げられる。上海新華書店旧蔵書から内部図書を探する場合、出版社を糸口として探すのが効率的であり、今回の調査でもこの手法を用いた。

6 内部図書の実例

以下に内部図書の実例を6点示す。いずれも上海新華書店旧蔵書に含まれるものであり、①～⑤は準市販品の乙類、⑥は非売品である。

①井上清著『日本の軍国主義. 第1冊』 (商務印書館, 1959.2) 【XP-B-14937】

灰皮書。著者は京都大学の著名な歴史学者・井上清である。裏表紙に中国語で「本書は1954年に日本の東京大学出版会が出版した井上清著『日本の軍国主義 I 一天皇制軍隊と軍部』に拠り訳出した」とある。

②井上清著『戦後日本史. 上冊』 (天津人民出版社, 1972.9) 【XP-B-11964】

黄皮書。①と同じく井上清の著書である。標題紙に本書が内部参考用である旨の注記が記載されている。

③程一鳴著『程一鳴回憶録』 (群衆出版社, 1979.7) 【XP-A-52045】

藍皮書。程一鳴はマカオに駐在した国民党諜報機関の責任者であり、1960年代になって中国大陸に亡命した。本書は程一鳴が国民党時代の活動内容を振り返った回想録である。

④知識出版社編『一大回憶録』 (知識出版社, 1980.6) 【XP-A-1119】

中国共産党自身が編集発行した、第一回党

大会の回想録。標題紙裏の「内容提要」には、本書の半分がこれまで国内未発表であった旨の記述がある。

⑤羅伊・麦德維傑夫著『論蘇聯的持不同政見者』 (群衆出版社, 1984.6) 【XP-B-25213】

一党支配体制下のソ連における、反体制思想を持つ者について論じた内容であり、裏表紙に「京内乙」と記載されている。京是北京、内は内部発行、乙は乙類を意味する。

⑥人民出版社資料室編『中国赫魯曉夫劉少奇 反革命修正主義言論集』([19--]) 【XP-A-84198】

失脚した劉少奇を批判するために編集された資料集。未公開の劉少奇の講演速記録・会談記録・指示・講話等を収録しており、中国共産党指導部や劉少奇の考え方についての資料の宝庫である。



図2 ①～⑥の表紙

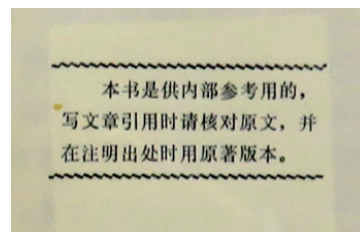


図3 ②の標題紙の記載

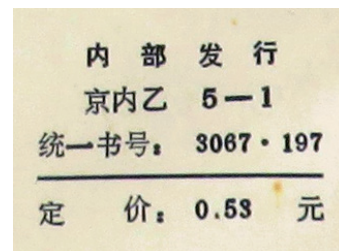


図4 ⑤の裏表紙の記載

¹⁹ 鄭異凡編『灰皮書：回憶与研究』漓江出版社, 2015, p.8. 【EB86-C1】

7 上海新華書店旧蔵書の調査結果

上海新華書店旧蔵書のリストはオープンデータとして公開されているが²⁰、内部図書に該当するかどうかは記載されていない。そのため、上述の『全国内部発行図書総目：1949～1986』と突き合わせるか、資料現物に内部図書を示す表記があるかを確認するほかない。内部図書の総数はおそらく数百点に上るだろうが、全体像の把握は非常に困難である。現時点で確認できている総数は百点余りであり、ほぼ準市販品の乙類である。

日本国内にある甲類の例として、京都大学人文科学研究所が多く所蔵する「〇〇革命歴史文件彙集」シリーズがある。「〇〇」には「北京」「湖南」等の地域名が入る。1980年代に各省で編纂された中国共産党の組織文書集であり、紛失の責任を追及するためのシリアルナンバーが付されている。

8 研究における内部図書の活用可能性

(1) 翻訳書を用いた日中関係史研究

日本の出版物を漢訳した内部図書を活用し、日中関係の一側面を明らかにすることが可能である。例えば、日中国交正常化が行われた1972年前後、中国では多くの日本関係書籍が翻訳され、内部図書として刊行された。これらはありのまま翻訳されたとは限らない。選書・翻訳・改変（改竄や削除等）の考察を通じて、中国当局は何に注目していたか、あるいは読み手の日本像をなぜ、どのように操っていたかを窺うことができる。

『大臣日記』【XP-A-10840】や『田中角栄其人』【XP-B-14966】といった田中角栄に関する内部図書はその一例である。田中が日中国交正常化当時の総理大臣であったため、関連図書を翻訳したものであろう。

木村武雄らによる『日本財界集団及其人物』【XP-B-19718】も内部図書だが、私が調べた限りでは日本では単行本として出版されていない。同書の翻訳説明を読むと、雑誌『中央公論』等に発表された連載記事をまとめたものとある。日中国交正常化前後の中国の政府

機関が『中央公論』の文章まで丁寧に確認していたことが窺える、興味深い資料である。

上海新華書店旧蔵書をより深く調べていくと、このような資料が多数見つかるはずである。これは日本関係に限らず、その他の国家（特にソ連）に関する資料も同様である。

(2) 文革期における「近代化」の考察

上海新華書店旧蔵書には、整理待ちのため現時点では利用できない雑誌群があり、今回確認の機会を得た。そこには文化大革命期の内部雑誌『国外科技消息』や『科技情報工作』も含まれていた。

これらの資料から、閉鎖的になりがちな社会主義中国がどのような海外の科学技術や学術に注目していたかが分かる。そして、文化大革命という大混乱の中でも「近代化」が追求されていたという新たな歴史像が見えてくる。また、文革期に翻訳された西欧史に関する内部図書『荷蘭史』【XP-B-12472】、『奧地利簡史』【XP-B-31469】等と突き合わせてみると、文化大革命の中で中国はどのような「近代化」を追求していたか、海外の知識が様々な人々にどのように読まれていたかを多角的に考察することができるだろう²¹。

(3) 新たな研究分野の開拓

中央公安部の傘下組織である群衆出版社の内部図書が多数含まれていることも確認できた。これらを活用して、中国共産党の公安警察やインテリジェンスといった未開拓の研究分野を立ち上げることが可能であろう。

例えば、公安警察の業務経験を記した『公安戦線先進事跡材料選編（一）』【XP-A-10972】や、外事警察の業務規程を記した『外事民警工作手冊』【XP-A-25016】、内偵調査の業務経験を記した『刑事偵察案例選編. 1』【XP-A-33883】、犯罪現場の調査経験を記した『怎樣勘査刑事犯罪現場』【XP-A-35250】は、中国共産党の公安警察組織を研究する上で貴重な資料である。

しかし、全体数は少ないためこれだけに依

²⁰ 「オープンデータセット」国立国会図書館。
<<https://www.ndl.go.jp/jp/dlib/standards/opendataset/index.html>>

²¹ 例えば、近現代中国の読書史を通時的に考察した比護遥

の著作は注目される。
比護遥『近現代中国と読書の政治：読書規範の論争史』東京大学出版会、2024。【UG11-R4】

拠して研究するのは難しい。公安関係資料を多数収録した『中共重要歴史文献資料彙編』（後述）という資料集があるが、この資料集を用いた研究の補足資料として活用するのがよい。

外国、特に西側の警察のインテリジェンスに関する翻訳書も含まれている。例えば、『納粹德国的諜報工作』【XP-B-43938】、『日本の警察機関』【XP-B-15811】、『蘇聯秘密警察』【XP-A-84280】、『美国總統的警衛工作』【XP-B-24398】があり、全て群衆出版社の内部図書である。公開情報の調査分析はインテリジェンスの定石であり、これらの図書を中国共産党の諜報機関にとっての調査レポートと見ることもできる。裏返せば、当時の中国共産党の関心や知り得ていた事項を窺うことができる。

陳情（市民からの申し立て）に関する研究も開拓の余地がある。『春風化雨集』【XP-B-24390、24391】は群衆出版社の内部図書だが、過去に発生した陳情案件を120事例掲載しており、全体主義下の多様な社会実態を理解する上で貴重な資料である。『中共重要歴史文献資料彙編』にも陳情関係の資料が含まれているため、併用するのがよいだろう。

9 『中共重要歴史文献資料彙編』とは

『中共重要歴史文献資料彙編』という名称はいかにも中国共産党の公式資料集のように見えるが、そうではない。これは中国大陸から流出した文書を整理した資料集であり、発行元は「中文出版物服務中心」という米国・ロサンゼルス市の秘密組織である。1949年以前の革命期から2000年代以降に至るまでの、中央・地方の機密扱いの文書資料や統計データの影印本8,000冊以上からなる。冊数は毎年増加しており、「中文出版物服務中心」が活動を開始した1995年から今日に至るまで資料が流出し続けていることを意味する。

国内では、東洋文庫、東京大学、獨協大学がそれぞれ数百冊所蔵しているが、NDLでは所蔵していない。国外では、米国のカリフォルニア大学ロサンゼルス校、ハーバード大学、スタンフォード大学、プリンストン大学や、オーストラリア国立図書館、香港中文大学、

台湾の国立政治大学等が系統的に所蔵している。また、ハーバード大学は所蔵分を電子化し、テキストの検索も可能になっている。

10 NDLへの要望

上海新華書店旧蔵書の書誌情報に、内部図書であることが分かる情報を追記してほしい。内部図書は多数含まれているはずだが、現状では全体像の把握が困難である。整理待ちの雑誌群の書誌データ作成に際しても、内部雑誌に該当する場合はその旨を記載するのが望ましい。

また、上海新華書店旧蔵書についての要望ではないが、『中共重要歴史文献資料彙編』の収集をお願いしたい。近年の中国では、外国人がフィールドワークや資料調査をすることのリスクが非常に高くなっており、中国研究の在り様に変化している。日本の現代中国研究はこの資料集に依存していると言っても過言ではないが、国内の所蔵は極めて少ない。私を含め、日本の現代中国研究者は海外まで閲覧に出かけているのが現状である。

11 質疑応答

NDL: 上海新華書店旧蔵書に、内部図書（準市販品の乙類）が多数含まれていることについてお尋ねしたい。このことから、新華書店が乙類の流通に果たしてきた役割をどう理解することができるか。また、甲類の流通ルートもご存じであれば教えて頂きたい。

周: 流通のルートは基本的には各地の新華書店経由のはずである。ただし、甲類と乙類の流通は別ルートとして厳格に分けられている。当局では乙類をそこまで気にしていないため、普通の図書と混ぜて保存することが一般的だったのではないかと。

しかし現在、内部図書をめぐる状況は大きく変化している。例えば、中国国内のほとんどの大学が導入している「読秀」²²というデータベースがあり、新旧問わず膨大な数の図書が電子化されている。4、50年前の内部図書も多く含まれており、大学生でも自由に閲覧できていたが、近年になって検索してもタイトルさえ出てこないという逆戻りの事象も確

²² 「關於読秀」読秀。

<<https://www.duxiu.com/bottom/about.html>>

認している。(周氏追記：2024年夏頃、内部図書だけでなく、人民共和国成立期から改革開放期にかけて公刊された図書も原因不明でほとんど「読秀」から消えた。)

NDL：中国国家図書館も内部図書や内部雑誌を所蔵しているか。また、それらは閲覧可能か。

周：内部図書の所蔵数は不明だが、内部雑誌の所蔵数は1,000種類を超えるとされる²³。閲覧できるかどうかは資料の性質による。中国国家図書館には「特蔵」(特別コレクション)²⁴という資料のカテゴリがあり、貴重資料に加えて「取扱注意」の資料群もここに含まれる。「特蔵」に分類されていれば外国人の利用は難しいだろう。その観点からも、上海新華書店旧蔵書は貴重と言える。

NDL：中国の地方の図書館や档案馆でのみ所蔵している内部図書や内部雑誌はあるか。

周：多数存在する。地方の図書館には必ず「地方文献」というエリアが設けられており、内部図書や内部雑誌も多少置かれている。また、北京大学など名門校の図書館も独自のコレクションがある。

档案馆には管轄地域内の内部雑誌が揃っているはずである。中国には機密資料を回収し焼却する「清退」という制度があり、内部雑誌や機密資料は定期的に焼却される。ただし、保存用のサンプルが档案馆や図書館に移され、档案あるいは「特蔵」の一部として保存される。

NDL：子ども・青少年向けの図書の中に内部図書は存在するか。

周：現段階で確たることは言えないが、おそらくは存在しないだろう。教師向けの指導書であれば内部図書はありうる。また、児童の思想教育を議論する内部雑誌を実際に見たこ

とがある。

NDL：何が国家機密かが曖昧という話があったが、たまたま現地の書店で入手した資料が機密に該当してしまう可能性もあり得ると思われる。研究における資料収集に際し、気を付けていることがあれば教えて頂きたい。

周：非常に現実的かつ難しい問題である。例えば、上海学術書店という日本の書店がある。中国の大手古書店サイト「孔夫子旧书网」²⁵からの輸入代行をしているが、注文時の注意に「内部発行」等の表示がある資料は受け付けないと明記している²⁶。私の経験では、準市販品の内部図書なら中国国内でも購入できるが、国外に持ち出す場合は意味が変わり、外交上のスパイ行為と誤認される危険性がある。逆に言えば、「国家機密」が線引きの曖昧なものであるがゆえに、海外の研究者が過度に自己規制を行う問題もある。

資料を入手しやすいという意味では、中国国内の研究者は有利な立場にいる。事実、ここ数十年で中国においては、北京大学に中華人民共和国史研究センター²⁷、華東師範大学に中国現代史研究センター²⁸、復旦大学には現代中国社会生活資料センター²⁹など各々コレクションの構築に注力する研究拠点が設立され、中国近現代史研究が目覚ましい進歩を遂げた。例えば、華東師範大学では数多くの内部図書と内部雑誌を集めているし、錚々たる研究者たちが在籍している。ただし、締め付けを強める政治的な動きが目立つ今日、これら貴重な資料にアクセスできるのは研究センターの関係者に限られる。つまるところ、研究成果の発表がますます難しくなるだろうが、中国国内の研究者の中で資料の特権層が出来ているのは事実であり、海外の研究者は『中共重要歴史文献資料彙編』などの流出資料に依存するほかないという状況である。

(しゅう しゅん)

²³ 李鳳英「中文内部期刊——被忽視的重要信息源」『内蒙古民族大学学报』17巻4期, 2011.7, pp.147-148.

²⁴ 郝春紅「近40年国内特蔵研究：内容、技術と服務」『図書館雑誌』42巻3期, 2023.3, pp.59-66. 【Z21-AC73】「館蔵一覧」中国国家図書館。

<<https://www.nlc.cn/web/dzzn/guotuziyuan/index.shtml>>

²⁵ 孔夫子旧书网. <<https://www.kongfz.com/>>

²⁶ 「<孔夫子>サイトからのご注文方法」上海学術書店。

<<https://www.shanghaibook.co.jp/main1/kfz.htm>>

²⁷ 北京大学中華人民共和国史研究中心. <<https://hprc.pku.edu.cn/>>

²⁸ 「中国当代史研究中心」華東師範大学歴史学系. <<https://history.ecnu.edu.cn/a4/3a/c21731a238650/page.htm>>

²⁹ 「当代中国社会生活資料中心」復旦大学社会發展与公共政策学院. <<https://ssdpp.fudan.edu.cn/ddzgshshzlxz/list.htm>>